もっと日本語を大切に

大阪大学大学院薬学研究科教授 赤井 周司
Shuji Akai

私は高校生のとき、国語が一番苦手であった。そこで国語の配点が一番低い大学を選んだ。理系の学部では、国語はそれほど重要でないだろうと思ったが、私の考えは間違っていた。

研究室に入ると、学会発表の要旨、論文、申請書など文章を書く機会がたくさんある。学生時代、原稿を指導教員に見ていただくと、いつも真っ赤になって返ってきた。自分の文章力の低さを嘆いたが、どうすればよい文章を書けるのか当時は見当もつかなかった。

40 半ばに教授として研究室を主宰することになり、電子メールを送る機会が劇的に増えた。最初は自分の文章に自信がなく、1つのメールを書くのにかなりの時間がかかっていた。そこで、受け取ったメールの中から使える表現を書き留めていった。同時に、学生の文書を添削する機会が増えた。最初は苦痛であったが、いつの間にか、あまり苦にならなくなっていた。その間に何が起こったのか。言えることは、膨大な数の文章を書き、添削したことである。「いい論文を書くには、とにかく数多くの原稿を書くこと以外にない」と野崎一先生が「有機化学 15 億秒」(化学同人、1986)に述べられていたことの意味が身にしみて分かった。

些細なことではあるが、最近、学生だけでなく教員が書く文章や研究発表などに「○○が明らかとなった」というフレーズをよく見かける。なにか違和感があると思いネットで調べてみると、「○○が明らか“に”なった」と書くべきであり、その解説も添えられていた。また、日常的に使われている語句が、本来とは違う意味で使われている場合がある。間違った用法や意味が市民権を得てしまうと、正しく使っている人が間違っていると認識されてしまいかねない。言葉の使い方に迷うとき、ネットで調べると解説のサイトがすぐに見つかる。便利な時代になったものだ。

研究室の学生に、毎日、天声人語を読むように勧めていた時期があった。当番の学生が毎日ネットから天声人語をダウンロードし、印刷して研究室のお茶のみ部屋に置いていた。どれだけの学生が興味を持ち、表現力の向

上に役立ったかは定かではないが、少なくとも私にとって天声人語を読むことは楽しみである。書き出しを数行読んで、これがどの話題につながっていくのかを想像する。読み終わってから、再度、冒頭の文を読み返し、なぜこの話題から入ったのかを考えてみる。新聞記事は、限られたスペースの中で、いろいろな事象を簡潔に伝えている。そうした良質の記事を、文の構造を分析しながら読み込んでみるもの楽しい。

ところで、この1,2年の間に自動翻訳が格段に進歩したとを感じる。私自身も英文を書く際に、ネット上の自動翻訳のサイトを時々利用している。その過程で、日本語文が英文に比べるとかなり曖昧であることに気付いた。日本語には主語や目的語が無いことがよくあり、会話では、それが特に顕著である。それでも通じるのは、前後の文脈から意味がおおよそ理解できるからだろう。それと同じ感覚でレポートなどを書く学生が増えている。読んでも意味を正確に捉えることができない。それでは学術レポートとしては失格である。誰が読んでも間違いなく、等しく理解できる簡潔明瞭な文を書かねばならない。さらに、必要な情報を欠いてはいけない。その意識と能力がないと、自動翻訳機能がどれだけ発達しても、よい英文は作成できない。

我々科学者は、国費によって行った自身の研究を社会に対して説明する義務がある。また、放射性物質による汚染、ウイルス感染などの重大な問題が生じた時には、科学に基づいた正しい情報や知識を伝える任務も持っている。間違った(もしくは不正確な)情報によって人々が過度に恐れることは、社会に大きな不利益をもたらす。同業者同士は専門用語を使うと簡単に分かり合える。しかし、専門分野外の人に分かってもらうことはかなり難しい。平易な言葉で、論理立てて簡潔明瞭に伝えることが肝要である。今さらだが、日本語を大切にしたいと思う。国語が苦手だった私が40年を経て習得したことで

(2020年12月14日受理)